

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 9 月 3 日現在

機関番号：34534

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26282204

研究課題名(和文)性差を考慮した「幼児版社会性・行動発達評価尺度」の開発

研究課題名(英文)Creation of a scale for the assessment of social and behavioral development in preschool children

研究代表者

郷間 英世 (Goma, Hideyo)

姫路大学・看護学部・教授

研究者番号：40234968

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,900,000円

研究成果の概要(和文)：性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発を行った。尺度は玩具や絵カードを用いた、子どもとのやりとりを通じた個別検査であり、15分から20分の時間を要する。577人への予備調査の結果29課題が選択され、各課題に通過(合格)基準を設け、保育園に通う3～6歳の幼児を対象に標準化を行った。結果として得られた社会性得点は年齢とともに増加し、S-M社会生活能力検査と一定の相関も認められ、5歳までの幼児の社会性や行動を評価する方法のひとつとして利用可能と考えられた。性差の検討では、社会性の発達は幼児期後半で女児の方が早いことが想定されたが、性差が明らかでない年齢もあり今後の検討が必要と思われた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により開発された、性差を考慮した「幼児版社会性・行動発達評価尺度」は、社会性や行動を評価できる尺度として、1)子どもの社会性や行動の発達の遅れや知的発達とのアンバランスさの評価や経過観察に役立てることができる、2)発達発達障害児のスクリーニングや診断、また、障害児の支援方法の検討や療育の効果の判定に利用することができる、3)健常児、発達障害児や「気になる子」の性差の評価および性差の実態や原因の検討に利用することができる、などが考えられる。

研究成果の概要(英文)：Developmental disorders have been drawing significant attention in recent research. So, we have developed a new assessment scale to measure social and behavioral development of preschool children. Based on preliminary survey of 577 children, we made this inspection scale. The scale consisted of 29 items such as "greeting", "understanding situations" and "action imitation." When undertaking the task, we gave one point and summed them as the "sociality score." Sociality scores increased with age and there was a positive correlation between sociality score and the result of social skill test (SQ) in 3, 4, and 5 years old children. As to the sex difference of social scores, significant differences were found at 5 years old children. We believe that this scale can be constructively used as a means to evaluate sociality.

研究分野：小児神経学、障害児・者支援学

キーワード：社会性 幼児 尺度開発 発達 性差 行動 気になる子 発達障害

1. 研究開始当初の背景

社会の諸構造の急激な変化と貧困や虐待など社会病理が目立つ環境の中で、現代は子育て・子育てが難しい状況にあるといわれている。子どもたちの様子を見ると、落ち着きのない子ども、容易に困難さから回避する子ども、容易に「キレル」「ムカつく」など短絡的行為を示す子ども、感情の不安定さや衝動コントロールの弱さを持った子どもが目立ってきていることは、かなり以前からいわれているが、いっこうに改善される気配はない。また、2004年の発達障害者支援法の制定以来、知的障害はないが社会性や行動・学習・微細運動などに課題をもつ発達障害児がクローズアップされ、早期発見と早期対応が求められているがいまだ十分ではない。われわれは長年にわたり、幼児期の健常な子どもたちの発達のアンバランスさ、および、発達障害児や「気になる子」の評価や課題について継続して研究を進めてきた。

2. 研究の目的

本研究では、1歳から6歳の子どもたちの社会性や行動の発達を評価するための、性差を考慮した「幼児版社会性・行動発達尺度」の開発を行った。15~20分で評価が可能で、我々のこれまでの研究結果から明らかになった、子どもたちの発達の性差、および、気になる子や発達障害児の性差を考慮して作成した。この研究により、現代の子どもたちの発達のアンバランスの評価、気になる子への対応やフォロー、発達障害児の早期発見、早期診断、療育の効果、などさまざま点に活用できることが期待できる。

3. 研究の方法

開発した尺度は玩具や絵カードなど(図1)を用いた、子どもとのやりとりを通した個別検査とした。まず、いくつかの課題を考案・設定し予備調査を行った。対象は1歳から8歳の保育園・幼稚園・小学校低学年児、計577人であり、検査実施後、項目別に年齢別通過率および50%通過年齢を求め、何歳相当の項目かを検討した。また、実施しにくいものや同じような発達曲線の項目は省き、尺度を作成した。作成した尺度を用いて健常幼児に対して、標準化作業および性差の検討、他検査との相関の検討などを行った。



図1. 検査課題に用いる用具 左から 指示の理解 あいさつ 動作模倣

4. 研究成果

作成された、検査尺度は表1に示した全29課題よりなる。各課題には通過(合格)基準が設けられており、それぞれの課題を50%の子どもが通過する年齢を適応年齢として、表1に示した。次いで標準化として、保育園に通う3~6歳の幼児を対象に本尺度を実施した。結果は、課題を通過した場合は1点とし、得点を合計したものを社会性得点とした。年齢別に平均値と標準偏差を算出し、次いで、保育園に通う3~6歳の幼児を対象に本尺度を実施した。結果は、課題

を通過した場合は1点とし、得点を合計したものを社会性得点とした。年齢別に平均値と標準偏差を算出し、性差の検討を行った。また S-M 社会生活能力検査、ソーシャルスキル検査、新版 K 式発達検査などとの相関を検討した。

表1. 尺度の適応年齢別項目

1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳
積み木模倣	絵の指差し	生活習慣	動作模倣	動作模倣	動作模倣
にんぎょう遊び	にんぎょう遊び	にんぎょう遊び	にんぎょう遊び	しりとり	
共同注意	指示の理解	指示の理解	指示の理解	指示の理解	
道具の操作		心の理論	心の理論	心の理論	心の理論
		クイズ	クイズ	クイズ	
		あいさつ	あいさつ		
			状況理解	状況理解	
			ストレス場面		

その結果、社会性得点は年齢とともに増加（図2）し、S-M 社会生活能力検査 SQ と一定の相関も認められた（図3）ことより、5歳までの幼児の社会性を評価する尺度として利用できると考えられた。

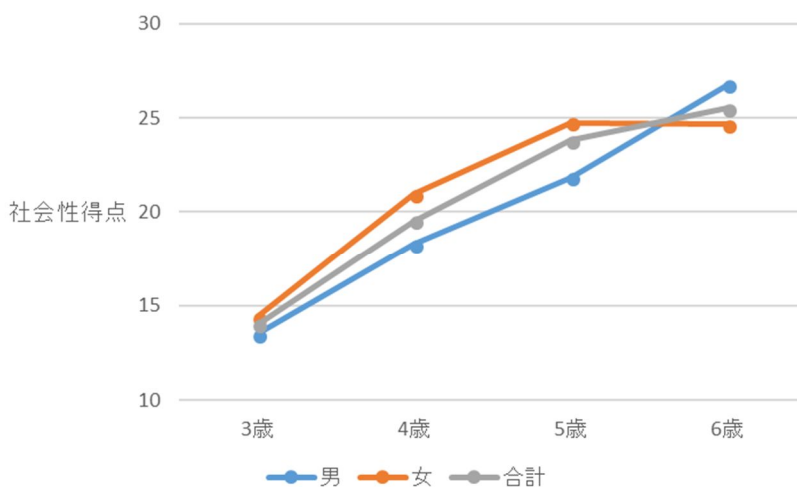


図2. 社会性得点の加齢に伴う発達的变化と性差

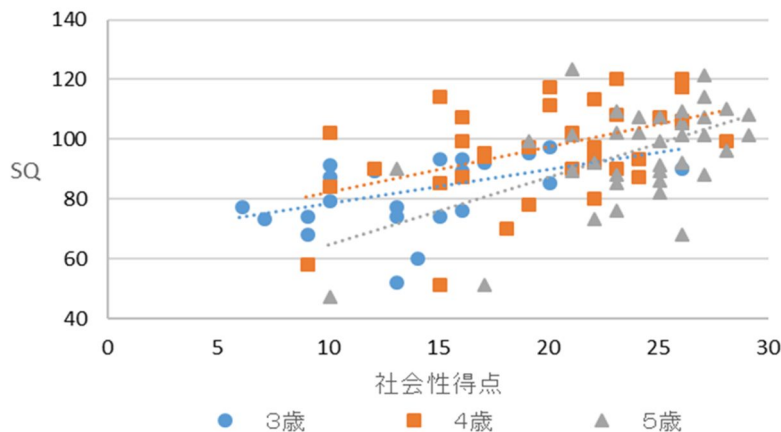


図3 . 社会性得点と社会生活能力検査結果 SQ との関連

性差の検討では、5歳で女兒が男児よりも得点が高かった(図2)ことより社会性の発達は幼児期後半で女兒の方が早く、男児が後で追いつくことが想定されたが、性差が明らかでない課題も多く、今後の検討が必要と考えられた。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文]

- 1) 郷間英世、知能検査・心理検査、小児神経学の進歩、第43集、P.9-21、2014
- 2) 郷間英世、障害児をとりまく現状から発達検査の役割と課題を考える 小児神経医としての立場からの検討、発達・療育研究、2015別冊、18、2015
- 3) 郷間英世、最近の子ども発達の变化と発達検査の課題 新版K式発達検査を開発する立場から考える 子どもの健康科学、17巻(1)、49-54、2017
- 4) 郷間英世、幼児期の発達評価の現状と課題 発達検査を開発する立場から考える 発達障害研究、39巻(1)13-18、2017
- 5) 田中駿、郷間英世、池田友美、小谷裕美、加藤寿宏、清水里美、井上和久、落合利佳、大谷多加志、武藤葉子、郷間安美子、圓尾奈津美、大久保圭子、原口喜充、性差を考慮した幼児版社会性・行動尺度の開発、幼児期のこどもの「しりとり」の発達、京都教育大学特別支援教育臨床実践センター年報、第7号、125-131、2017

[学会発表]

- 1) Goma H, Kotani H, Otani T, Sato N, Changes in Children's Mental Development in Japan, The 14th Congress of Association for Infant Mental Health, 2014.6 (Edinburgh, England)
- 2) 郷間英世、現代の子ども発達とASD児の発達評価、第17回日本子ども健康科学学会学術大会、2016.3(東京)
- 3) 郷間英世、幼児期の発達の性差についての検討 社会生活能力の加齢に伴う変化、第62回日本小児保健協会学術集会、2015.6(長崎)
- 4) Hideyo Goma, Haruka Nakaichi, Noriko Sato, Reiko Ushio, Hiromi Kotani, Sex Differences on Social development of infants and preschool children in Japan, 15th Congress of World Association for Infant Mental Health, 2016.5, (Praha, チェコ)
- 5) 郷間英世、田中駿、池田友美、小谷裕美、牛山道雄、加藤寿宏、清水里美、井上和久、落合利佳、大谷多加志、武藤葉子、郷間安美子、圓尾奈津美、大久保圭子、原口喜充、性差を考慮した幼児版社会性・行動尺度の開発(1) 「あいさつ」の項目の予備調査の結果、第63回日本小児保健協会学術集会、2016.6(大宮)
- 6) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者(学会発表5)に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動尺度」の開発(1) 「動作模倣」の項目の予備調査の結果、第63回日本小児保健協会学術集会、2016.6(大宮)

- 7) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発「しりとり」の項目の予備調査結果の報告、日本発達障害学会第51回研究大会、2016.8（京都）
- 8) 郷間英世、田中駿、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動尺度」の開発 予備調査結果のまとめ、第59回日本小児神経学会、2017.6（大阪）
- 9) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発（3）-「クイズ」の項目の予備調査結果の報告 - 第64回日本小児保健協会学術集会、2017.6（大宮）
- 10) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発（3）-「ストレス場面の対応」の項目の予備調査結果の報告 - 第64回日本小児発達障害学会、2017.8（前橋）
- 11) Hideyo Goma, Shun Tanaka, Michio Ushiyama, Rika Otani, Kazuhisa Inoue, Toshihiro Kato, Satomi Shimizu, Yoko Muto, Natsumi Maruo, Takashi Otani, Creation of a scale for assessment of social and behavioral development in preschool children, 15th International Child Neurology Congress, 2018.11 (Bangkok, Thai)
- 12) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発（3）-「状況理解」の項目の予備調査結果の報告 - 第64回日本子ども健康科学学会、2017.12（奈良）
- 13) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発（3）- 指示の理解の予備調査結果の報告 - 第29回日本発達心理学会、2018.3（仙台）
- 14) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発（3）-「心の理論」の項目の予備調査結果の報告 - 第64回日本小児保健協会学術集会、2018.6（鳥取）
- 15) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発（3）-「にんぎょう遊び」の項目の予備調査結果の報告 - 第64回日本発達障害学会、2018.8（前橋）
- 16) Hideyo Goma, Shun Tanaka, Michio Ushiyama, Rika Otani, Kazuhisa Inoue, Toshihiro Kato, Satomi Shimizu, Yoko Muto, Natsumi Maruo, Takashi Otani, Creation of a scale for assessment of social and behavioral development in preschool children, 15th International Child Neurology Congress, 2018.11 (Mumbai, India)
- 17) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発（3）-「就学前児用社会的スキル尺度との関連について - 第30回日本発達心理学会、2019.3（東京）
- 18) 田中駿、郷間英世、及び他の研究分担者及び研究協力者（学会発表5）に同じ、性差を考

慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発 - 新版 K 式発達検査 2001 との関連について -
第回日本小児保健協会学術集会、2019.6 (東京)

19) Hideyo Goma, Shun Tanaka, Michio Ushiyama, Rika Otani, Kazuhisa Inoue, Toshihiro Kato, Satomi Shimizu, Yoko Muto, Natsumi Maruo, Takashi Otani, Creation of a scale for assessment of social and behavioral development in preschool children, World Congress of the International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities, 2019.8 (Glasgow, Scotland)

[図書]

1) 郷間英世、編著、発達障害医学の進歩 No26. 発達障害児の幼児期からの支援、診断と治療社、2014

2) 郷間英世、共著、最新子ども保健、日本小児医事出版社、2017

6. 研究組織

(1) 研究代表者

郷間 英世 (GOMA, hideyo) 姫路大学・看護学研究科・教授 研究者番号：40234968

(2) 研究分担者

池田友美 (IKEDA, tomomi) 摂南大学・看護学部・准教授 研究者番号：70434959

清水里美 (SHIMIZU, satomi) 平安女学院大学・短期大学部・教授 研究者番号：80610526

落合利佳 (OCHIAI, rika) 大阪大谷大学・教育学部・教授 研究者番号：80435304

牛山道雄 (USHIYAMA, michio) 京都教育大学・教育学部・准教授 研究者番号：90397836

井上和久 (INOUE, kazuhisa 大谷大学・教育学部准教授) 研究者番号：70738583

加藤寿宏 (KATO, toshihiro 京都大学・医学部・准教授) 研究者番号：80214381

小谷 裕実 (KOTANI, hiromi) 京都教育大学・教育学部・教授 研究者番号：10294266

(3) 研究協力者

田中駿 (TANAKA, shun) 兵庫教育大学・学校教育学部大学院

大谷多加志 (OTANI, takashi) 京都国際社会福祉センター

大久保圭子 (OKUBO, keiko) 赤穂養護学校

武藤葉子 (MUTO, yoko) 奈良教育大学特別支援教育研究センター

鈴木万喜子 (SUZUKI, makiko) 京都教育大学特別支援教育臨床実践センター

中市悠 (NAKAICHI, harruka) 家森クリニック

郷間安美子 (GOMA, amiko) 京都国際社会福祉センター

川越奈津子 (KAWAGOSHI, natsuko) 長浜市こども発達支援センター

圓尾奈津美 (MARUO, natsumi) 京都市保育園連盟

原口喜充 (HARAGUCHI, yoshimitsu) 大阪大学・大学院

栗山美紀子 (KURIYAMA, mikiko) 山階保育園